

ペシャワール会報

No.33



ペシャワール会 〒810 福岡市中央区大名
 一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
 電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二

- ダラエ・ヌールへの道(2)〔戦火の果て〕……………中村 哲
- 中村君をペシャワールへ派遣する前の話…………… 問田直幹
- やっと少しわかってきた…………… 藤田千代子
- ハイテクならぬロウテクで…………… 林 達男
- 2年め3年めの人が増えてこそ…………… 松本智子
- らい研修を終えてペシャワールへ…………… 栗林由美子
- マイペースではじめます…………… 長谷川昭一
- 自分の仕事への認識を新たにして…………… 倉松由子
- 三無主義…………… 中村 哲
- 第2回理事会報告…………… 村上 優
- ペシャワール会報告会〔アンケートより〕

民家にて*表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ダラエ・ヌールへの道

(2)

戦火の果て

JAMS 顧問医師 中村 哲

クナール渡河……………*

峠を越えた我々は十一月二六日夕刻、クナール河畔に到着、日没寸前に渡河した。クナール河は、東部ヒンズークッシュ山脈溪谷の氷雪から溶け出る水を集め、カプール河に合流する。幅は広い所で五百メートルもある大きな河である。そうそうと流れるクナール河の諸溪谷は併せて四国以上の



遺棄された高射砲や弾薬（「毎日新聞社」提供）

面積があり、川沿いに沃野を提供する。

両岸の迫る場所がいくつもあり、渡しが往来する。水牛の中身をくりぬいた皮を浮袋にし、これをいくつか並べて板ぎれを乗せた筏で、四メートル四方くらいはある。船頭は川底の岩を要領よく押して急流を斜めに進み、向こう岸にたどり着く。真ん中に女子供を乗せ、我々男どもは端に置かれる。手足をくぐられた牛の原型を留める浮袋が、ひょうさんに波間をせわしく揺れる。下流を見ると、広大な谷間に燃えるような夕日が沈みかけ、川面は一面に黄金色にさざめき輝く。日暮れの寒風でチャダルに身をくるむ人々の姿が、影絵のように無言でうごめく。美しい自然の情景に皆しばし疲れを忘れる。

対岸のヌールガルの宿場に着いた時には、日はとっぷりと暮れていた。

宿場といっても、小さなチャイハナ（茶店）とせいぜい二十名泊まれる粗末な宿があるだけである。ちょうど、川下のジャララバード方面から来たゲリラの一部隊と宿を共にした。長らく政府軍の要衝として堅牢を誇ったジャララバードは、既に陥落したばかりだった。彼らの話から、市内で

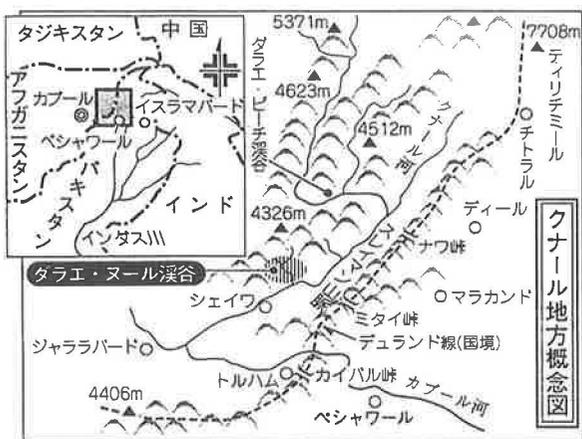
は相当の激戦があり、激高した占領部隊の報復で多数（おそらく数千名）の犠牲が出たことが想像された。

しかし、翌年一月の米露の武器供与停止は確実なものと思われていたから、反政府勢力の同市制圧はペシャワール・ジャララバード間の交通を再開し、カイバル峠は当然開くだろう、我々の活動が今より容易になる時期は遠くない、と一同は明るい気分を取り戻した。歩きずくめだった我々は、食事を取ると泥のように眠りに落ちた。

戦火の果て……………*

十一月二七日、我々一行は目標のダラエ・ヌール溪谷の入り口に到着した。未明に宿を出てから、相乗りのジープで三時間、クナール河沿いの荒れ果てた道路を行く。かつては肥沃な盆地が川沿いに広がっていたことを想像させるが、水路は破壊されて枯渇し、漠々たる荒野と見違ふ耕地と村落の残骸が至るところに広がっている。瓦礫の山と化した部落の跡が痛ましい。一九八八年以来続いた「復興援助」の鳴り物入りの騒ぎは完全に停止していた。

クナール溪谷全体には政治党派が乱立し、めいめいの思惑で動いていた。食料にさえ事欠く住民自身は、嫌でもこの色分けに区分されて生き延びねばならなかったが、本音は面従腹背で、「今はやむを得ない」というのが真情であった。政治抗争に部族対立が絡み、近隣諸国と大国の干渉があり、政情は複雑を極めていた。



〔毎日新聞〕より

渓谷出身のムーサーは、見慣れた光景とはいえ、懐かしさと怒りを隠せなかった。肉親の多くを殺され、彼もまた一ゲリラ隊を率いて郷土を守って果敢に戦った。ソ連軍の撤退した現在、なぜ内戦が続くのか、なぜ我々をそっとして置かないのか。彼らはこの混乱の元凶たる何者かに対して、戦争時以上の闘争心と情熱をたぎらせていた。だが、今それは診療所建設の意欲として具体的な目標を与えられようとしていた。

アバタのような砲弾の痕で荒れた道路を、クナール河沿いに走る。大きな弾痕を避けるためサインカーブを描いてジープが行く。「アフガニスタ

ン復興支援」の国際救護活動は、道路舗装一つ満足に実施し得なかった。実際にはドイツとスウェーデン系の難民救援団体が巨額を費やしたにもかかわらず、その金はいずれここに消え、現地は放置されたに等しかった。所詮、ゆきずりの外国人にとっては紙上の業績が重要だったに過ぎない。

ここから約二時間の道程で、ドラエ・ヌール渓谷の入り口、シェイワに着く。このシェイワからさらに二十キロメートル下ればかつての政府軍要衝都市、ジャララバードがある。シェイワ南方、ドラエ・ヌール渓谷から見ると河を挟んで真向かいに小高い山があり、依然として砲台がこの道路をにらんでいた。一九九一年二月の予備調査に訪れた際、砲弾を我々に見舞った地点である。

小規模なこぜりあい以上の戦闘はなく、クナール河沿いの盆地は全体的に相対的な安定状態に入っていた。さらに一步ドラエ・ヌール渓谷に入れば、住民は殆ど独立した自治体制にあり、政治的影響を強くは受けていなかった。とくにドラエ・ヌール渓谷内部は完全な自治態勢下にある。渓谷下流はパシュトゥン族が占め、推定四万人の約半数が難民化してパキスタン側の国境バジヨウル難民キャンプに移っている。上流の少数民族であるヌーリスタン族の殆どは戦争中も難民化せず、山奥の自給自足生活に耐えている。

すでに渓谷では戦争中からJAMSの下工作が行われており、各村に協力的な者が多数居て、我々の調査に快く協力してくれた。一週間の平和な山歩きは快適で、おおよその実情は調べることが

できた。

渓谷の地勢と民族……………*

ドラエ・ヌール渓谷は三千〜四千メートルの尾根（最高峰クンドウ 四五二六メートル）に囲まれる地域である。日本の「郡」以上の広さがある。その北部山岳地帯はヌーリスタン族の居住地であり、渓谷上流はその一部の部族が住み、南部方言のパシャイイーを母語とする。同渓谷のパシャイイー族の推定人口は約三〜四万人、険しい山の斜面に集落をなして住み、殆どは半農半牧で、狭い耕地に小麦を作って自給自足している。渓谷上流になるほど耕地も狭く、一見してその生活は厳しい。主食は下流のパシュトゥンと同様、小麦粉を焼いたナン、パニエール（チーズ）、豆類で、鶏や肉類は客人や祝事の時のみ食べる。絶対的なカロリー不足で、乳幼児にはマラスムス（栄養失調の一種）が極めて多い。

現金収入源は、ヤギや羊・乾燥果物などと共に、未精製の麻薬（ケシ）があったが、多くの村ではケシ栽培廃止をジルガ（長老会議）で決定しており、ケシ栽培は減少している。土地所有は自作が殆どであるが、かつてはクナールのハーン（パシュトゥンの領主）に属するものもあったらしい。

ヌーリスタンはかつてカフイリスタン（異教徒の国）と呼ばれ、ここ一世紀ほどでイスラム化した所である。数世紀は変わらぬ伝統社会を守っており、下流のパシュトゥン部族以上にパシュトゥンらしい習慣を残している。



破壊された家屋に住む人々（「毎日新聞社」提供）

即ち、男性優位の社会、家族の敵対と復讐法、男女隔離、客人のもてなし、ジルガ（長老会議）による自治制などである。男性は殆どがパシエトウ語をも解し、服装もパシエトウンと大差ないが、女性は古来の伝統衣装を身にまといている。

農耕は女性の労働、牧畜は男性の労働で、一応の分業がある。家族にもよるが、女性の労働は一般に苛酷であり、少女期より農耕のやり方を教えられ、適齢期になると買い取られる。しかし、パシエトウンと異なつて比較的開放的で、顔を覆うことはない。

しばしば発生するのは、「ザル・ザン・ザミン（女・金・土地）」に関する事件で、これが「ドシユマン（敵）」を作る原因となることが多い。ことに女を奪われることを恐れる男たちは監視の目

をゆるめず、家を長期に空けることができないこともあるという。

戦争の影響と農村の解体……*

一九七九年十二月のソ連軍進攻直後から、クナールは「封建性の温床」とされて徹底的な攻撃を受けた。ソ連軍の撤退する一九八九年まで、クナールとその周辺の渓谷はソ連リカプトル政権の支配下におかれていた。その結果、農民たちは戦火を逃れてパキスタン側の国境地帯に難民として逃れた。その数はクナール盆地全体で五十万人以上といわれる。

グラエ・ヌール渓谷でも、当然激しい内戦が展開されたが、軍の攻撃は渓谷下流域のパシエトウン部族民に集中し、少数民族のヌーリスタン部族は概ね戦火を免れた。これは政治的に重要性が薄かったためと、険峻な山岳地帯は占領維持が困難であるためで、事実、地区のゲリラ部隊はこの山岳地帯を根城にして頑強な抵抗を続けていた。JAMSの渓谷出身者もその仲間であった。

このため下流域では破壊が甚だしく、ほとんど廃村に近い村もある。難民としてパキスタン側に逃れたものは約二十万人以上と推定される。ソ連政府軍の去った現在、農民たちは三々五々帰郷し始めてはいたが、今度はイスラム諸党の内部抗争や医療への不安などから、難民キャンプ生活をすぐには捨てきれないのが実情だった。また、ペシャワールなど大都市への出稼ぎの困難なこと、長い難民生活の間に若い世代が現金生活に慣れて農

業に復帰できないこともある。さらに、戦火の残したもう一つの目に見えぬ爪痕は、肉親の間に敵対関係を多く生み出したことである。「政府軍協力者」という烙印を押された家族が帰郷するのは不可能である。

それでも、ごく一部ではあるが殆ど独力で耕作は始められていた。この渓谷に関する限り、幸い地雷の埋設はない。パシエトウンもヌーリスタン族も、渓谷の住民は何れの党派からも自由であり、昔ながらの自治を巧みに守っていた。伝統的なジルガによる統制が弱まってはいたが、地元ゲリラ指導層が地域の防衛と秩序維持にあたっていた。

（つづく）



一九四六年福岡市に生まれる。一九七三年九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワール・ミツシヨン・ホスピタルに赴任。ら

いのコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わりと共に一九八六年JAMS（ジャバニアフガン・医療サービス）を設立。長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創出をめざしつつ現在に至る。著書に『ペシャワールにて』（石風社）、『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

中村哲君をペシヤワールへ派遣する前の話

ペシヤワール会会長 問田直幹 といだなおき

私が中村学園大学につとめるようになって間もなく、中村哲君が学長室にやって来た。日本キリスト教海外医療協力会（以下

J O C S）がパキスタンのペシヤワールで働く医師を募集しているの、それに応じたい、と言うのである。経歴を聞くと、九

大医学部で私の講義を受けたかつての学生であった。私は「やっと現れたか」と心が高鳴った。

話は一九六一年の三月にさかのぼるが、

私はJ O C Sの理事として米子に赴き、田中潔医学部長に面会、公衆衛生学の助教授の岩村昇君を、二年間休職の状態でJ O C Sからネパールに派遣する医師として働く

ことを許可してもらいたい、とお願いした。ネパールの事情がよく分からなかったから

である。福岡中学、旧制福岡高校、九大医学部と、常に二年後輩であった彼はスジを通す男であることを承知していたからである。果して許してくれるかしら、と案じて

いたが、即座に「そんな男がうちの大学にいるとは」と喜んでくれた時はほっとした。そしてその後、長い間願っていたのに、

私の教えた学生からJ O C Sの外国派遣医

師に応募する者がいないのを淋しく思っていた。それが今、目の前に現れたのである。しかも私の中学（今は福岡高校）と大学の後輩ではないか。私は神の御配慮に心から感謝した。

それからあとのことは、ペシヤワール会報や中村君の『ペシヤワールにて』ですでに御承知の通りである。

ただここでぜひつけ加えたいのは、中村君を派遣するにあたりいろいろ配慮して下さったJ O C Sの奈良常五郎主事、また中村君の担当理事であった長崎太郎君（私の教えた学生の一人）、さらに中村君がペシヤワールに行くきっかけを作って下さった福岡登高会の会長であられた新貝勲氏、そして特に、中村君のためJ O C S時代からペシヤワール会の事務局長として努力を惜しまなかった佐藤雄二君（彼の結婚の媒酌を私がつとめた）、これらの方々のみ霊安かれと切に祈って筆をとどめる。

（九州大学名誉教授）



●今考えると、恐ろしいことをしてたなあ

やっと少しわかつてきた

●インタビュ

福岡徳洲会病院所属
JAMS看護婦

藤田千代子

藤田さんがペシャワールに赴いて今年で三年め。一時帰国中もさまざまな研修に余念のない彼女に、現地での日常生活から悩みまでを、ざっくばらんに聞いてみました。日本にいる私たちは、現地ワーカーの仕事をとかく美化しがちです。しかしワーカーとして生身の人間、彼等の悩みや問題を私たちもできる限り共有することこそ、現地を理解し協力してゆくために、必要なことではないかと思えます。

——例年帰国すると研修に追われていましたが、今年は幾らか余裕があったようですね。

藤田 研修自体はそうでもなかったのですが、家族のこととか世間的なことでもエネルギーを使いました。

——今年の研修はどこで受けられましたか？

藤田 らいについては岡山の邑久光明園と東京の多摩全生園で受けました。あと、語学をやったかったのでここ（事務局）で二週間はどアメリカ人の方から英会話を習いました。

——内容は。

あと、中村先生から教えていただき、それを次の日には使うようにこころがけました。

同じ言葉を何回も何回も、それしか知らないのでは、機会を見つけてはその言葉を使う場面を考えました。同じ言葉を何回も使っているうちに段々と言葉も増えていきました。

——自分で辞書も作っていたでしょう。藤田 日本語Ⅱウルドゥ語辞典です。時間はかかったんですけど、役に立ちますね。

——行く前には勉強されましたか？

藤田 いやー全然できなくて。後で考えると英語もウルドゥ語もできなくて、何か軽い気持ちで行ったような気がします。行けばどういかなるやという気持ちで。今考えると、恐ろしいことをしてたなあ、考えが甘かったかなと思います。

——行って、何か月ぐらいして患者さ

ん達と意思疎通ができるようになりましたか。

藤田 中村先生は普通の日常会話からではなくて、病院で患者さんとやりとりするための会話をまず教えてくださったんで、そのまま使えていたので、いつ頃から話せるようになったのかよくわからないですね。スムーズに話せるようになったのは一年ぐらいしてからです。

——初めは医学用語から入ったんですね。

藤田 はい、あとは言葉を置き換えて日常語に入りました。自分がどうするか、どうしたいかとか、「おなか为空いた」というのはすぐ覚ええましたよ。「食事をしに家に帰る」とか、食べることに関しては皆早く覚えるみたいですね。

——まずは、衣食住の食からですね。

藤田 あとは、買い物とか。

——買い物は自由にできないでしょう。

藤田 でも全然しないというのも困るんで、カンジャン（JAMSの運転手さん）が連れていってくれますけど。それでも私たちが行くのはせいぜいバザールの入り口の八百屋さんぐらいですね。

——それはかなり不自由ですね。

藤田 そうですね、でもカンジャンに

医学用語から入ったウルドゥ語

——ウルドゥ語はどういう風にして勉強しましたか？

藤田 ウルドゥ語は毎日仕事を終えた

主なものは頼めるので、凄く不自由だ
なと思ったことはないですね。

ワールド・ワークはたいへん

——向こうでの日常生活を教えてください。

藤田 現地には、夏時間と冬時間があ
って、夏時間だと、朝は七時四十五分
から始まります。わりとスタッフが時
間にルーズなんで、朝だけはきちんと
集まって前の晩の患者さんの状態とか
を皆に申し送るようになっています。最近の
ことで、五分位朝礼をやりませう。最近の
ことですけど。

それを習慣付けようということでは
四時十五分までにきっちり出勤して、
十二時三十分まで仕事して、一時間休
憩をとります。その後四時三十分まで
仕事です。四時三十分からは自由時間



事務局で語る藤田さん

なので、それぞれ家に帰って食事をし
たり本を読んだりしています。それは
月曜日から土曜日まであまり変わらな
いです。

日曜日はワールドワークで、患者
さんのチェックに行きます。

——ワールドワークはJAMSのス
タッフと行くんですか。

藤田 チェックは私たち女性スタッフ
とミッション病院のレプロシテクニ
シャンが行くんですけど、車とドライ
バーはJAMSからで、州政府のフイ
ールドワーカーも一緒です。

——チームワークはスムーズにいきま
すか。

藤田 そうですね。うまくいっていま
すよ。でも患者さんがなかなか見つけ
にくいんですよ。

——それは女性を探すとということで見
つけにくい。

藤田 そうではないんですけど、やは
り女性の患者さんを探すというのが主
体になりますね。

——個人の家にいくんですか。それと
もどこかに集まってきてもらうんです
か。

藤田 大体患者さんの家を探しますね。
ある家族から一人らしいの患者が出たら
その家族全員をチェックするんです。

患者さんの家にはなかなか行き着か

ないんですよ。朝九時三十分ごろ出発
して、その家を見つけないのに二時間
も三時間も……。あんまり能率は良く
ないんですけど、州政府の人がけっこ
う熱心に、本当に身軽に動かれるんで
す。一生懸命やるのが苦にならないみ
たいですね。

——一日に何家族ぐらい。

藤田 大体、三家族ぐらいですかね。

あらかじめ行くと連絡してないので、
いなかったり、引越してしまったりす
るんですよ。住所が正確に記入されて
いないせいもあって、家を見つけない
と自体が難しい。現地の人と一緒にだ
と見つけやすいんです。やはり土地勘が
あるから一緒に仕事をしないとけな
いと思いますね。

——チェックの対象になるのは難民の
人達ですか。

藤田 難民の人達のところへもいきま
すし、普通の民家にも行きます。でも、
行ったら大変なんです。言葉の問題
もあるし、らいかどうかチェックする、
そのことにも時間がかかるし。

患者さんたちはバシトゥ語がほと
んどなんです。それで、患者さんと家
族との関係や構成を調べなければいけ
ないんですけど、最初の頃、慣れない
うちはすぐく時間がかかってしまっ
たんです。そのうちに外国人が来ると

ないんですよ。朝九時三十分ごろ出発
して、その家を見つけないのに二時間
も三時間も……。あんまり能率は良く
ないんですけど、州政府の人がけっこ
う熱心に、本当に身軽に動かれるんで
す。一生懸命やるのが苦にならないみ
たいですね。

中村先生と手術に従事する藤田さん



いので、物珍しいのか「足が痛い」
だの「腰が痛い」だのと、いっぱい人
が集まってくるんですよ。そうすると
どの人が患者さんの家族かわからなく
なるんですよ。最初は頭がごちゃごち
やして。だからサッとチェックしてサ
ッと帰らないといけないんです。中村
先生によく怒られています。

——そういうわけで日曜日はフィール
ドワークです。

水曜日は手術日で朝から一日手術を
しています。

——手術は誰が。

藤田 中村先生です。パキスタン人の

医師はまだちょっと手術できないので、JAMSからアーベットさんというアシスタントをよんでしています。彼は有能な看護士です。

女同士だとあけっぴろげ!?

—普通の日の午前中と午後の仕事について説明して下さい。

藤田 午前中は大体患者さんの手や足の傷の処置、ガーゼ交換などで、大体それで終わりますね。外来患者も、女性の患者さんだと、女性の私たちじゃないと診れないのでそちらに行ったりします。

午後からは熱のある人を見たり、女性患者の病棟によくいってけるかな。女性部屋にいくと、これがまた訴えが多いんですよ。「やつと来たか」という感じで、いろいろ話しかけてきたり。

—女性の患者さんたちは看護婦さんに対してはいろいろ言ってくるんですか。

藤田 ほとんどの人がいろいろ言ってきますね。「子供ができない」とかこちらが恥ずかしくなるようなこととか——女同士だとかなり開けっぴろげになるんですか。

藤田 そうですね。体を見せてくれるのも「もういいよ」というぐらい。——でも、そういう意味では看護婦さ

んの存在は非常に重要ですね。

藤田 そうなんです。スタッフ(男性)もあんまり女性部屋に行かないんですよ。薬を配りにいくとか、回診の時ドクターについていくぐらいですね。——例えば中村先生のように長くいて、慣れてくれば抵抗ないですか。

藤田 それでも中村先生一人のときは見せないとダメですね。私が一緒だといいですけど。

—要するに二人きりではだめということですね。

藤田 ええ、あとのスタッフには全員出してもらって、中村先生と私と三人だつたらいいみたいです。それでも服をはぐつてというのはいないですね。

—産婦人科はありますか。出産は病院でするんですか。

藤田 JAMSの近所に産院がありますが、家で産む人が多いんじゃないですか。サダーカット(ミッシオン病院のスタッフ)の奥さんが出産のときは、家で、一緒に住んでいるお母さんと妹さんが手伝って産んだらしいですよ。産婆さんなしたったそうです。子供が多いから、慣れているんじゃないですか。

底力を感じるモスリム達

—イスラム教では金曜日が休日にな

りますけど、ミッシオン病院ではどうですか。

藤田 ミッシオン病院はキリスト教系の病院なので日曜日が休みですが、私は休みは好きな日とっていいんですよ。

—スタッフは皆クリスチャン?

藤田 ええ、サダーカット以外は全員クリスチャンです。

—患者さんはモスリムがほとんどでしょう。病院がクリスチャンに改宗させようというようなことは?

藤田 それはいいですね。お互いがお互いを無視してると言うか……。

—宗教的なことで何か感想を持ったことはありますか。

藤田 うーん、ただ、根強いなあということは感じますね。ちいさな子供でもコーランのことを頭にいられて、ちゃんと説明したりするんですよ。

—私たちは仏教のことを説明できないですよ。

藤田 私でもできませんよ。それに、皆が同じ神様アラーのみを信じているので底力があると言うか、根強いものを感じます。

—子供達は学校に行ってます?

藤田 行っている子も、いない子もいますね。

小さい子が入院すると、必ず、その

部屋の大人がコーランを読んであげてるんですよ。なかなかいい光景ですね。目が不自由な人がいると、今度はその子がコーランを読んであげるとか。

—コーランは語じているんですか。それとも読んでいますか。

藤田 何か読んでいるみたいですが、読めない子もいるでしょうね。

男性患者には気を使う

—そう言えば、宗教的なことかどうかわからないけど、一緒に働いているスタッフはほとんどクリスチャンですけど、私たちとの接し方というか態度がモスリムの人とは違うんですよ。ちよつと馴々しいというか。サダーカットはモスリムですので、彼はどこかパシッと距離を置いているというか、他のスタッフと違いますね。

—で、患者さんは一〇〇パーセントモスリムですから、病室での私たちのやり取りを見たらどう思うかなというのを去年、はつと思つたんですよ。難しいですね。

—日本人としては普通でも、あちらではものすごく馴々しいと思われるというわけですか?

藤田 そうかもしれないです。それと、私たちは病棟の中では、シヨールは被っていないですね。外に出るときは被

患者さんに声をかけながら治療する



りますすけど。

一度、すごい田舎から出てきた患者さんが入院したばかりの頃に、松本さんが薬を配りに病室に入ったらしいんですね。そのとき、前からいる患者さんは何ともないらしいんですけど、その患者さんが「早く出る！」って、すごく真剣な顔で追いつくと言っていますよ。彼女は後で怖かったと言っていましたけど。

——患者さんと看護婦は治療のときにどうしても触れ合うわけですからね。それでも、男性の患者とうまく距離を取つとかないといけないから、そこが難しいんですね。

藤田 例えば、男性の患者が「おなか痛い」となったとき、スタッフを連

れていって、どこが痛いかスタッフに触れてもらつてみるんですね。どこまでこちらが触っていいのか、まだよくわからないから。中村先生に聞いたりするんですけど。

——向こうが拒絶することはあります。足の傷の手当てなんかは抵抗はないみたいですけど。

藤田 傷の処置に対しては患者さん側にも抵抗はないみたいです。でも、男性の患者さんに対しては、例えば、背中を見るときとか、服をはぐつてもいいのやろうかという気持ちがいつもありますね。

自分が役に立たないと自覚して

——ちょうど二年になりますけど、一年目はまず、現地に慣れるのに精一杯だったんじゃないですか。

藤田 そうですね、あつというまでしたもんね。本当に一年前は「わあ、何しにきたつちやろうか」という感じでしたから。でも二年目と同じで、本当に役に立たないなあという感じですよ。

——この前の会報にも書いてましたよね。でも、自分が役に立たないと思うのは、二年目になって、何が役に立って、何が役に立たないかが見えてくるからじゃないですか。

藤田 そうかなあ……。

らいというのがすごく難しいんですよ。いっぱいしなければいけない領域があつて、それは絶対にしなければいけないことで、過剰にするというわけではなくて、最低限しないとダメ、考えなければならぬことが本当にたくさんあるんです。そういうのが段々分かってきたというか。らいというものがだんだんわかってくるにつれて、自分が役に立たないなあとおもうんですよ。

私はらいの現場で働いたことがなかったし、そういうのに気づくのが遅いんじゃないかな。患者さんの足にどういう靴が必要とか、やつと分かってきたという状態なんです。

——らいというのが普通の感染症と違って劇的に治るといったことはないし、忍耐の必要な病気ですね。合併症の問題とか、あらゆる問題が出てくるんじゃないかな。

藤田 そうですね、ほんとに自分が役に立たないと思いますよ。

——どういふときに役に立たないと思つたり、苛立つたりしますか。

藤田 うーん、もうこれにつきてるんですけど、現地の人と一緒にやるというのが凄く難しいんですよ。

自分が満足するためには、患者さんに対してこれだけやったとか、患者さん

んに信頼されたとかでいいんだと思うんですよ。でも、やつぱり、自分だけ満足しても後にはなんにも残らないんですよ。

——どういう風にしたら現地の人とやっていけるか、そのことについて努力の足りなさを感じます。

現地の人が動かないとするでしょ。すると、いつまでも同じ状態が続くわけですよ。そうすると私はもう二年たつたわけですが同じなんです。離れてみれば違うのかもしれないけど全然進歩がないんですよ。

私が二年間いて、その人達と関わってきたことが役に立たなかったんじゃないかな、とか、やり方が悪かったんじゃないかなとか。気になるんです。

——スタッフの問題ですね。以前会報に書いてたように長い目で見れば少しは変わってきているんじゃないですか。

藤田 そうですね。まあ、一年目に行つたときの接し方と二年目に行つたときと少しずつ変わってきたとは思いますが。スタッフが患者さんのことで相談してくることもあるし。一年目はこちらも患者さんのことがわからなかったし。そういう面では変わったなあと思いますね。

(次号に続く)

●四〇年前の技術が役に立ちました

ハイテクならぬロウテクで

●インタビュ―

JAMS放射線技師

林 達男

今回、現地ワーカーとして三度目のペシャワール行きを控えた放射線技師林達男さん。

年齢・言葉の問題など、事務局の不安を見事に払拭し、着実に現地の人々の中に溶け込み、存在を根付かせた林さんに、現地での様子、何が林さんをペシャワールに引戻すのか、など伺いました。暖かい心と人生経験に裏打ちされた林さんのお話は、言葉や形ばかりに捉われがちな私達への多くの示唆を含んでいます。

健康な間は行かせてほしい

—林さんは今回三度目ですけれども、藤田さんの話では、回りの人達が「もういいんじゃない」と、というような言い方で、ペシャワールに戻ることをなかなかかわかってもらえないということを聞いたんですが、林さんの場合はいかがですか。

林 そうですね。やはり「(林さんをペシャワールに)やらん会」というのを作ろうなどという話もありましたが、私の場合、(年齢的に)焦りがあるんですね。旅費を使って申し訳ないけれ

ども、健康な間は行かせてくれ、という気持ちです。

—奥様はどんな風におっしゃってるんですか？

林 行くな、とは言いませんけど。暗にね。「そんな(身体の)状態で行けるとね？」なんて言ってますが……。

—言うても聞かん、と。

林 そう、そう。

—林さんは、断続的にはありますが、もう二年ほどペシャワールに行かれていますね。最初からそういうつもりだったんですか？

林 そうですね。できれば二、三年続

けて行きたいと思っていましたね。ですけれども、最初は佐藤事務局長の計報で昨年の十二月に帰国し、二回目はラマザン明けに酷暑を避けて帰国しました。今度はまた、十二月に甥の結婚式で帰ってくることになります。

—現地の人は、やはり何度も戻ってくる林さんを嬉しく思っているのですか？

林 そうですね。何度も「帰るな」と言ってくれます。まあ、社交辞令かも知れませんが、涙まで流してくれる人もいます。

—林さんにとって何度もペシャワールに戻っていく理由は何なのでしょう？

林 患者さんですかね。「自分も日本に連れて行ってくれ」なんて患者さんたちに言われると、本当に後ろ髪を引かれる思いがするというか……。

ハイテクならぬロウテクで

—以前にも会報で紹介しましたが、きっかけは中村先生の『ペシャワールにて』を読んで触発されたということ、お母様を看取られて後、行こうと決心されたんですね。

また、国際障害者年の活動にも積極的に参加されたりなさっていますが、やはり若い頃から社会的な活動に関心がおありだったんでしょうか。

林 そうですね。及ばずながら私でも何か役に立つことがあれば、という考えなんです。



事務局の「おとうさん」的存在の林さん(右端)



林さんの作った仮義足で訓練する若い女性患者

もちろん日本でもたくさんすること
 があります。ただ、日本には他にも若
 い人がたくさんいらっしゃるし、私は
 誰も行かない所に行こうかと……。そ
 れで自分が役に立てば、まあ、立つ
 たのかどうか分かりませんが……。
 ——ワーカーには若い人が多いんです
 が、実際に現地に行ってみると、日本
 の最新医療技術や機器とのギャップが
 大きいという問題がありますね。林さ
 んの場合ハイテクならぬロウテクと言
 いますか、何もモノのない時代からモ
 ノのあふれた現在までお仕事をされて
 こられたので、その技術の幅の広さに

私など感動したんですが、そういう点
 で、昔の技術が現地では役に立ったの
 ではないですか？
 林 私たちの時代は、終戦の最悪の時
 代で、非常にハングリー精神がありま
 したね。開設間もない新光園に就職し
 たのですが、本当に色んな手伝いをさ
 せられました。
 その時に学んだことは、学問だけで
 はだめだと。体で覚えた技術的なこと
 の方が大きかったです。例えば木で義
 足を自ら作ったりしましたしね。ペシ
 ヲワールに行ってそういう四十年前も前
 の技術が役に立ったんですよ。

現地にも義足を作る病院があるん
 ですが、それが出来上がるまで私の作
 った仮義足で練習していた患者さんが、
 その病院に行つて義足をつけたら、す
 ぐに上手に歩けると評価を受けた時は、
 感動しました。
 X線に関しては、向こうの機械は中
 国製の粗末なもので、胸の厚い人の場
 合うまく撮れないとか、電圧の調整と
 か色々難しいのですが、一度スイッチ
 を入れ患者を静止させたまま再度スイ
 ヲチを入れるとうまくゆくんです。そ
 ういう時昔の技術が役に立ったよう
 ですね。

鍼治療が役に立って

まあ、中村先生におだてられてです
 ね。古いもんが役に立ったかな……と。
 それと四十五、六年前に習つておいた
 鍼治療も役に立ちました。

以前会報にも書きましたが、ある時
 シヤワリ先生、中村先生と三人で昼食
 をしていると、シヤワリ先生の食が進
 まない。で、中村先生に聞いてみると
 胃かいようだ。そこで「あなたの鍼
 治療をやってみたらどうか」と言われ
 たんですよ。

それでシヤワリ先生に鍼を三日やっ
 たところが痛みが止まって、私もびつ
 くりしました(笑)。

そこでシヤワリ先生が他に何が治せ
 るか尋ねられるので、ぜん息も治せる
 と言うと、早速翌日ぜん息患者を三人
 連れて来られたんです。

女性が二人だったんですが、ひじを
 出せと言つても出さない。女性は肌を
 見せないわけです。それなら治療はで
 きんと言つと、渋々出したので治療し
 たところ、翌日ずいぶん良くなったん
 です。

十年も医者をやつてる主治医の先生
 は、初め疑いのまなざしで見つておつた
 んですが、二日目、三日目と患者を治
 すうちにニコニコ顔になって。
 一週間経つて患者を呼ぶように言う
 と、皆退院してしまつてもういないと。
 私自身もびつくりしました。

それ以来、JAMSのナンバー2の
 部屋を与えられて、そこで治療するよ
 うになりました。

皆もよろこんで「ピシアル・タシ
 ヲヤクル(大変ありがとうございます)」
 と言つてくれるし、他の医者も、この
 病気は治せるか、あの病気は治せるか、
 と言つて聞いてきたり。

それから六十歳位の男性患者のリユ
 ウマチに鍼治療をしたのですが、来る
 時は杖をついて来ていたのが帰る時に
 はそれを忘れて行つてしまつてね。

「パパ(ご老人)、杖をお忘れですよ」

JAMSの若いスタッフと共に



と追いかけていくと、本人もああ、と驚いていました。お祈りの時膝を曲げることができなかったのに、と私の目の前で階段の昇り降りをしてみせてくれましたよ。

そのほかにも、炎症の様子を見に行った患者さんから、「ピシアール・タシヤクル」とバナナをお礼にもらったりしてね、そういうことがまた行くきっかけになりました。

経験したことの無い喜び

——林さんにとっても大きな喜びだったというわけですね。

林 これまでに経験したことの無い喜びでした。自分のかくれた才能を見

だしたようで。

——行く前には言葉の不安などあったと思うんですが、具体的な治療効果に加え、年の功というか、若い人にはなかなかできない言葉なしのコミュニケーションションもずいぶんされたようですね。

林 はい。嬉しかったのは、シャワリさんのいとこ（女性）が座骨神経痛ということ、ある日連れて来られたのですが、女性は夫以外の男性には肌を見せないとそろなのに、ちゃんと服をめぐってくれました。

まあ大変大きな人で最初出したハリが通らずにもっと長いハリを出さなくてはいけなかったりしましたが、四日目には良くなりました。

付添いで付いて来ていた妹さんの肩凝りもついでに治してやったら喜ばれましたね。しまいには「カム・トゥー・マイ・ハウス」とか言われてドキッとしました。中村先生に相談したら、ニヤニヤしながら「行きやいいやない」と言われるんです（笑）。

後で分かったことなんですが、実は中村先生も他の日本人女性ワーカー達もその家に一緒に招待されていたんですね。

「林はカワイイ」

そこで家に行ってみると、その人の

ご主人が出てきて、「お前か、俺の女房を治療したのは」などと言われるもので、ハラハラしていると「サンキュー。今日はご馳走を一杯食べて行ってくれ」と言われて胸をなでおろしました。

客の前に女性が姿を現わすことなどまずないのに、皆出てきて一緒に座ってくれて。「林はカワイイって言ってますよ」、と藤田さんの通訳で知らされて、男冥利に尽きるなあ、と。（笑）

藤田さんに、普通、女の人はドクタにも肌を見せないのに、林さんは役得ですね、とからかわれましたよ。

ほんとに、X線を撮る時も絶対に女の人は服を脱ぎません。金属類など身に付けてないかと確認しても、撮ってみたら服に安全ピンやホックがついていることなどしよちゅうです。そういう習慣なのに腰まで見せてくれた、「心を許してくれた」ということに感動しました。

——実際に困ったことはなかったんですね。

林 ないですね。X線撮影の時は向こうのスタッフがやりますし、私は電圧・胸の厚さ・時間のチェックだけで。あと服の上からですから、フィルムのずれが生じることがありますが、スタッフが考えながらやっていますし。

ただ、もう少し言葉が通じたら、症状の説明などしてあげられるのに、とは思いますがね。「アッサラマレイコム（こんにちは）」とか「痛いか、痛くないか」とか、鍼治療のときは「良くなったか」とかぐらいですから。

——それは、パシウトウ語なんですか。

林 それ、わからんのですよ。ウルドウ語やらパシウトウ語やら色々あるもんですから、私が一生懸命患者さんに話しかけていたら、スタッフから「その人はパシウトウン族だからウルドウ語で話しかけても分かりませんよ」とか言われたりします。通じない時はスタッフに通訳してもらいます。

——スタッフとは何語で？

林 片言の英語とベルシヤ語・パシウトウ語を混ぜてです。

（次号に続く）

▼お譲り下さい▲

- ・パソコン(NEC 98シリーズ)
- ・テレビ(14、19型 軽量のもの)
- ・ビデオ(VHS方式)
- ・ファックス

*事務局で使いますので、ご不用のものがありませんらご連絡下さい。取りに伺います。

二年め三年めの人が増えてこそ……

元ペシャワール・ミッション病院看護師

松本智子

ここ数年の間に、ようやく長期のワーカーの派遣が実現できるようになりました。一カ月の現地派遣にも大騒ぎしていた頃が遠い昔のように、長期のワーカーの希望者も増えています。それだけに、短期では見えなかつたさまざまな問題も見えるようになってきつつあります。松本さん（帰国後結婚されて田中姓に）には昨年十月から今年七月まで勤務していただきましたが、その貴重な体験から一文を寄せてもらいました。

パキスタン滞在期間を振り返ってみて感じるのは、一年間では短かすぎることである。

私の場合、ことばや生活習慣、現地の雰囲気慣れるのに約三ヶ月を要し、なんとなく全体像が見えてくるまで更に三ヶ月、そして酷暑の夏を迎え帰国する頃になって、漸く癩癩に関して漠然とではあるがわかり始めたという感じであった。

また、私の実感として、帰国寸前には、私はい

つたい何をして来たのだろうか、これでよかったのだろうか、とスッキリしない常に胸中にモヤモヤ感を残しており、今更ながらのように焦燥の気分を味わった。

現地での「看護マニユアル」的なものを作成し、それを活用してゆけばもっと早く仕事に入ってゆけるのではないか。また一年目はここまで、二年目はこのくらいまでというように仕事の内訳ができれば、少し楽な気持ちで取り組めるのではないか、などの考えも少なからずあった。今後日本人スタッフが継続して送り出されるようになればそれらも必要になってくるだろうし……。

二年目、三年目の人が増えてこそ、暗中模索の中から創造も生まれてくるのではないだろうか、との思いを強く感じた。

結局、中途半端な形で終わってしまった私だが、患者さんやスタッフ、また自分自身の為にも、できる限り長期活動ができるような態勢で臨むこと

が、本当の意味での医療協力だったのではないだろうか……とフト最近考えたりもする。今回継続することはできなかったが、またいつの日にかペシャワールの地を踏める日が来ることを願っている。

（参考までに）

- 人間関係の問題はどこへ行っても同じです。
- 困ったのはなんとと言っても「ことば」。日本で修得し万全な形で臨まれたら現地での苦労は半減すること間違いなし!!



宿舎の庭でくつろぐ松本さん(右から2人目)と栗林さん(昨年10月)

らい研修を終え、ペシヤワールへ

元熊本地域医療センター看護婦
ペシヤワール・ミッシジョン病院看護婦 栗林由実子

静かで穏やかな瀬戸の青い海に囲まれた国立療養所邑久光明園（岡山県）で私の『らい研修』は始まりました。

らいが身近なものとして存在しない時代に育ってきた者にとつて、日常生活の暮らしの中であらいを知り得る機会は無に等しいものでした。これまでの臨床経験はもちろん、これまでの人生であらいの患者さんに出会うことの一度もなかった私は、らいについて何の予備知識も持っていなかったのです。

らいが不治の病であった頃の悲しいほどの過去の歴史の一端を、今回患者さんの後遺症という形を通して、本当にたくさん学ばせていただきました。

らい疾患特有の臨床症状についての講義では、久しく目にするものなかった基本的な解剖・生理のテキストを手にし、もう

とつくにどこかに置き忘れてしまっていた知識を呼び戻しては、今さらながらそうだったのかと確認することの喜びにも似た一種の感慨で、その関心は増していったものです。そして、障害を持ちながらの不自由な日常生活における介護・看護ケアの大切さを痛感しました。

最も心傷めたのは、患者さんの重複障害におけるその人の人生に及ぼす不自由さの何と長く厳しいものであるかということでした。らいが治る病気となった時代の日本だからこそ、私はこれらの方々の不自由な身体・お姿をけつして忘れることはないと思います。

研修を通してらいという疾患だけでなく、それを取り巻くさまざまなものが多少見え始めてもきました。

らい看護は、そこに専門領域とするもの



手術中の栗林さん(右)と松本さん(中)

を確かに有しながらも、しかし全てが特殊ではなく、病を持つ人との関わりにおいては、看護者もまた一人の人間としてどう向き合うかということに変わりはないと思いました。

ところで、ゆつたりとした周りの環境とは逆に、今回の研修は私にとって「えっ？何故？ どうして？」と次々に問いかけ、或いは問いかけられているもう一人の自分



募 集

ペシャワール発

「共に歩む」ワーカーを!!

JAMSとミッション・ホスピタルでは日本からのワーカーを募集しております。ただし、現地は熟練した医療技術者の腕の発揮できる日本の医療現場からは程遠いものです。これから、現地事情に合わせ、現地の「人づくり」を目指し、一緒に築き上げてゆこうとするものです。「高度の技術を教えてやる」のではなく、「共に歩む」ワーカーを歓迎します。

短期長期を問わず受け入れます。送り出す日本の社会は一般にゆとりなく、短期の協力でも大きな困難があります。私共は現地でこれらの方々をの便を回ることしかできませんが、以下の条件で受け入れます。

① 募集対象：

1. 医療技術者（医師、看護婦（士）、検査技師、理学療法士など）。又は事務関係者で外国語（英語又は現地語）の堪能な者。
2. 以上に加え、年齢20歳以上、発展途上国の医療や人々の暮らしに関心があり、心身とも健康で、さしあたり最低限、日常英会話ができる者。
- ② ワーカーは、現地で1カ月、ペルシャ語またはパシュトゥウ語又はウルドゥウ語を習得、現地の人々と交わりを深めて仕事をさせていただきます。
- ③ 派遣団体などからのサポートのない場合、ペシャワール会派遣とし、1年以上の方は、現地の住居の便宜、及び現地生活費と日本からの往復交通費などを負担します。
- ④ 学生などの短期見学も拒みません。但し、ゆきとどいたお世話をするゆとりがありませんので、依存せずに独力で来て下さい。（繁忙期には断ることもあります）
詳しくはペシャワール会事務局に直接お問い合わせ下さい。

〒810 福岡市中央区天神1丁目10-24
福岡 YMCA 内ペシャワール会
電話（毎水曜日夜7時～10時）
092-731-2372

の発見でもありました。

原田園長先生、小原先生はじめ看護職の皆様、そして出会うことのできた多くの若い患者さん方と貴重な時間を共にできましたこと、今とても感謝しています。

有り難うございました。

*

昨年十月のペシャワール現地見学から帰国して、迷いながらも心決めた十二月、そしていつも暖かく見守り育てていただいた熊本地域医療センターを離れることとなった今年の四月。以後、時間はあるようであつたかみようがなく、どこから何をしていたの

か何が必要なのか、分からないままいたずらに時間だけが通り過ぎてしまったようでもあります。ただ、福岡のペシャワール会の事務局で過ごす日は、多くの事務局の方々の顔を拝見しお話をしては、いつも元気をいただいで熊本に帰っていたように思えます。

現地医療活動の為の日本での支援対策作戦本部としてのペシャワール会事務局は、いつ誰が出掛けて行っても居心地が良く、そして不思議な所のような気がします。ペシャワールへ行っても、きっと私は事務局での皆さんの様子を目に浮かべ、そして会

に届けられます多くの会員の方々のご協力やご支援のあることを思い出すにちがいません。

出発の日はずいぶん目の前に迫ってまいりました。異なる国での生活に、まずはどれだけ適応できるのか不安はありますが、おそれから経験豊かな心強い藤田さんのアドバイス、お力添えを受けながら、ペシャワールタイムの流れの中に身をおき、現地の方々と共に働くチームの一員になりたいと思います。

ペシャワール会の会員の皆様、どうぞ宜しくお願い致します。

マイペースで はじめます

JAMS 医師
長谷川昭一



皆様お元気でし
うか。

私は、今度ペシヤ
ワールで働くことに
なつた長谷川と申し

ます。出身は北海道で、高校卒業後は新潟に住んでおります。4年前に大学を卒業し、以来主に一般病院で内科を研修しました。

私は以前より海外医療協力に関心があり、そのチャンスを待っていました。今回こういう形で実現することになり、現在は期待と不安が入り交じつた心境です。

さて私は、今年5月から6月にかけて、バン格拉デッシュのミャンマー難民キャンプで仕事をする機会がありました。そこで出会ったのは、軍事政権の迫害を受けて脱出した人々で、竹やビニールで覆っただけの小屋に住んでいました。栄養状態は非常に悪く、下痢性疾患や呼吸器感染症で多

くの命が失われていました。日本は現政権に対する最大の援助国ですので、私たちは難民発生に間接的ながら手を貸していたことになりました。このことを知り愕然としたことを覚えています。ペシヤワールの場合事情は異なると思いますが、意外なところで私たちと深い関係があるような気がします。

海外で仕事をしたのはバン格拉デッシュの短期協力1回だけですので、ことは、人間関係、実際の仕事などうまくやっていけるか、かなりの不安がありますが、マイペースではじめてみようかと考えているところです。

それでは、どうかよろしくお願ひします。

自分の仕事への 認識を新たに して

元多摩全生園理学療法士
倉松由子



はじめまして。今

度ペシヤワールへ遊
びに行かせて頂くこ
とになりました(と

夫は思っている)。

理学療法士の倉松由子です。

これまで約四年間、東京にある多摩全生園というらい療養所に勤めていました。全生園での仕事は老人のリハビリテーションが主で、らいの療養所というよりは、(もと強制収容所の)老人病院に在るという感じていました。しかし、ペシヤワールへ行きたいと思つてあわててらいの勉強を始め、あらためて患者さんたちを見直してみたら、やっぱり何よりもまず、医療的にも社会的にもらいの患者さんだったと、自分の仕事への認識を変えられた次第です。

わたしは学生時代から山登りが趣味で、アジアの方へも山を登りに行ったことがあります。そうして思つたのは、いつか山登りだけでなく、働きに来てみたいということでした。ただ医療の分野では、リハビリテーションよりもっとプライマリな職種の方が必要とされているだろうと考へていたのです。

中村先生の本を読んでらいに關して伝染病としてのコントロールだけでなく、二次的な障害への対処も大事に考へていらつしやるのを知つたのと、会報に藤田さんが書いた患者さんの手の話を読んで、わたしも仲間に入れて頂きたいと門を叩きました。どうぞよろしくお願ひします。

たまた、ペシャワール会の理念などを尋ねられることがあるが、冗談の通じる者に対しては、私は「無思想、無節操・無駄」の三無主義である、と答えて人をケムに巻く。

■無思想

第一の「無思想」とは、特別な考えや立場、思想信条、理論に囚われないことであり、どだい人間の思想などタカが知れているという我々の現地体験から生まれた諦観に基づいている。ペシャワール会の発足した初めには、「〇〇主義」の論客も居ないではなかったが、そのうち自然に離れていった。自分だけ盛り上がる慈悲心や、万事を自分のものさしで裁断する論理は、我々の苦手とするところである。

例えば難民キャンプで、食うや食わずの子供の明るい笑顔を、「哀れな人を助けなければ」と頑張っている外国人ボランティアの暗い表情と比べて見ると、私はひそかに忍び笑いを催すのである。何も失うものがない人々の天真爛漫な楽天性というのは確かにある。名譽財産はもちろん、いこじな主義主張を人が持ち始めると、それを守るためにどこか不自然な偽りが生まれ、ろくなことはないものである。良心や徳と呼ばれるものでさえ、「その人の

輝きではなく、もっと大きな、人間が共通に属する神聖な輝きである」というある神学者の説は頷けるものがある。これを自分の業績や所有とするところに倒錯があり、気づかぬ微りや偽りを生ずるとというのが私のささやかな確信の一つである。

■無節操

第二の「無節操」とは、誰からでも募金を取ることである。乞食から取ったこともある。これは説明を要する。赴任して程なく、私はことばの練習を兼ねてバザールをうろついていた時期

三無主義

があった。時に乞食にも遭遇する。一般にペシャワールの職業的乞食はわりあい堂々としており、「右や左の旦那さま」というような惨めたらしさはない。「ゴダーイ・デル・コシャリーギー（神は喜びます）」と述べ、「出せ」とばかりに手をさしたす者もある。私も暇であったから、「人から施しを受けるには少し態度がデカイのではないか、『済みませんが、いただけないでしようか』くらいの腰の低さがあつた方が実入りが多いのではない

か」と問い糺したところ、ある乞食が案外まじめに説明してくれた。

「あなたは神を信するサルマーン（イスラム教徒）ではありませんな。ザカート（施し）というのは貧乏人に余り金を投げやるものではありませんぞ。貧者に恵みを与えるのは、神に対して徳を積むことです。その心を忘れてはザカートもありませぬ」

この乞食が高僧のような気がした。「私も人に見捨てられたジュザム（らい）の患者のために、はるか東方から来てかくかくしかじかの仕事をし

中村哲

ておる。ならば、私もサルマーンで、これもザカートということになりはしないか」
「そのとおり」
「ならば、あなたも我々の仕事に施しをなされ。神は喜ばれますぞ」
私がぬつと手を出すと、乞食はちゅうちょなく集めた小銭をくれた。私はまさかとは思つたが、つまらぬ議論に神を引き合いに出し、何か大切なものを冒瀆したような気がして畏れを覚えた。同時に、純朴な人達だと思つた。

以後、我々もこれを採用し、「貧しい人に愛の手を」などという惨めたらしい募金はせず、「神は喜ばれます」とこそ言わないが、年金ぐらしの人の千円も、大口寄付の数百万円も、等価のものとして一様に感謝していただくにしている。現地の人は心までは貧しくないのである。

■無駄

第三の「無駄」とは、後で「無駄なことをした」と失敗を率直に言えないところに成功も生まれまいということである。いつも成功のニュースを届けて喜ばせるのが目的となつては本末転倒で、嬉しいことも辛いことも、成功も失敗も、共に泣き笑いを分かち合おうというのである。そもそも、このような仕事自身が、経済性から見れば見返りのないムダである。

時に募金のために活動をアピールすることがあつても、我々は自分売り渡す騒々しい自己宣伝とは無縁であつたと思う。この不器用な朴訥さは、事実さえ商品に仕立てるジャーナリストからもしばしば痺たがられた。だが、こうしてこそ、我々は現地活動の初志を見失う事なく活動を継続できたのである。

●第2回理事会報告

息の長い支援体制の確立を

ペシャワール会事務局長 村上 優

らしい診療から始まった中村医

師のパキスタン北西辺境州・アフガニスタンでの医療活動は、この十年間で大きく変わりました。狭い意味での診療活動にとどまらず、彼の地での医療教育、予防活動、リハビリテーション活動、さらには戦火に荒れた農村の復興活動への協力と広がりを見せています。

中村先生自身も「私が前面に出るのでなく、後ろから支え、見守ることに徹する」と話されるように、この活動を担っているのがパキスタン・アフガニスタンの現地の人々です。そして、この活動を背後から支えているのは日本からの支援です。「中村先生を支える」だけでなく、「総勢スタッフ七十人を越すJAMSの活動を支える」までになった現状を考えなければなりません。息の長い支援体制の確立こそが急務ですし、それがペシャワール会の活動目的にな

ります。

その目的にそって会の組織を確かなものにするために、これまであつた運営委員を廃し、本年三月に理事会が発足しました。さる七月二十五日に第二回理事会を開催しました。全理事が参加し、役員

の承認、会則の検討、予算案の審議、派遣スタッフへの支給規約の検討をおこないました。理事会では財政の確立のために、努力いただいている現状や、提案がありました。また事務局体制もこれまでのボランティア体制から専従スタッフを置くように提案がありました。まだすぐには解決できないことも多く、今後は事務局で検討したことを理事会で協議していただくことになりました。役員・理事は以下の通りです。

(敬称略)

会長

岡田直幹 (九大名誉教授)

副会長

高松勇雄 (若久病院長)

理事

岩橋文吉 (福岡女学院大学学長)

後藤哲也 (医師・福岡鶴城ライオンズクラブ)

佐藤耕造 (医療法人徳洲会病院専務理事)

佐藤誠 (熊本大学教授)

志満秀武 (財団法人福岡YMCA総主事)

林達男 (JAMS放射線技師)

林祐二 (医療法人うら梅の里会理事)

藤井健児 (香住ヶ丘教会牧師)

美奈川成章 (弁護士)

村井瀨一 (会社経営・名古屋ライオンズクラブ)

監査役

瀬尾亮二 (西南自動車(株)専務取締役)

役

村上優 (国立肥前療養所医師)

事務局長

岩橋文吉 (福岡女学院大学学長)

後藤哲也 (医師・福岡鶴城ライオンズクラブ)

佐藤耕造 (医療法人徳洲会病院専務理事)

佐藤誠 (熊本大学教授)

志満秀武 (財団法人福岡YMCA総主事)

林達男 (JAMS放射線技師)

林祐二 (医療法人うら梅の里会理事)

藤井健児 (香住ヶ丘教会牧師)

美奈川成章 (弁護士)

村井瀨一 (会社経営・名古屋ライオンズクラブ)

監査役

瀬尾亮二 (西南自動車(株)専務取締役)

▼ご協力下さい▲
●ペシャワール会10周年記念
シヨヒラティ・トルン
コンサート

●日時 1993年1月30日(土)

2回公演

*登の部 2時

*夜の部 6時半

●場所 福岡市中央市民センター

●入場料 前売 二五〇〇円 (当日二八〇〇円)

●連絡 ペシャワール会 (092) 731・2372

ペシャワール会も来年で10周年を迎えます。これを記念して中国・新疆ウイグル自治区出身のシヨヒラティ・トルンさんのコンサートを開催します。ウイグルはアフガン・パキスタンと同じイスラム文化圏ですが、かつてはシルクロードでペシャワールともつながっていました。シヨヒラティさんはウイグルの伝統的民族音楽家の承譜に連なる歌手で、その民族楽器ドゥッター(二弦)による弾き語り、聴き手を西域の草原へと誘います。

なおコンサート収益は、会員数が二千人を越え、パンク状態にある事務局のパソコン等機器類の充実と現地事業にあてます。

*チケットの販売等ご協力をお願いします。

ペシャワール会報告会(アンケートより)

●中村先生の現地報告を聞いて

■現地に役立つこととは

た。マスコミの外国情報のいい加減さを痛感しました。

(大野城市 H・Y 40才 男)

*中村先生の発言に「金太郎アメを切ったような話」とありましたが、本来の援助活動では一朝一夕で終わるものでもなくまた変化するものではないと思います。その意味でも、やはり地道に淡々と相変わらず活動されている姿を拜見し、嬉しくもまた安心もいたしました。やはり息長く続けることが大切だと感じています。

(福岡市 M・Y 41才 男)

*中村先生の大河のような御思想にふれ得まして感激しました。

(太宰府市 K・S 37才 男)

*初参加ですが、中村先生のお話、実にわかり易く私が日頃考えている事(世界観)と共通する点が多く感心しました。年が若いのに実に善人、これに勝る人はいないでしょう。ささやかですが協力して行きたいと思えます。

(福岡市 71才)

*『ペシャワールにて』、「視点」「会報」等で美文に酔わされてきましたが、お目にかかったのは初めてでした。とてもわざわざの効いた語りにまたまたしびれまし

(福岡市 K・K 65才 男)

た。マスコミの外国情報のいい加減さを痛感しました。

■自分を見つめ直す

*藤田看護婦さんのお話のように、実際に現地で働いている方の悩みが聞けて大変よかったです。

(府中市 43才)

*現地時の流れにも似て、88年以来同じスライド(?)を使つての講演に今年はいきなりビデオが登場したのは驚きでした。音声が入ってないのが残念です。シャワリ先生や現地スタッフの肉声がーもちろん私はペルシャ語もウルドゥ語もわかりませんがー聞ければと思います。

(鞍手郡 Y・A 31才 男)

*ドップリ日本の社会につかたてしまっている自分を少し別の角度からながめてみる機会を得ました。

(福岡市 N・H 45才 男)

*私達の日常生活と非常にかけはなれた事柄なので想像するのがむずかしい。感情移入が可能なように少し勉強したいと思つた。

(丁・H 女)

*ペシャワール会の活動が、ますます深い意味と内容を求められるようになったと感じています。

(福岡市 M・O 65才 男)

*この悪い状況、かつ不安定な情勢という所で、言葉の違い、文化の違いといった様々な障壁をかかえながらも地道な医療ワーカーの活動や現場の状況が、非常に解りやすく、すごく感銘をうけました。自分もこの会に役立つといいなと思つています。

(福岡市 S・G 女)

*毎日新聞で中村先生のコラムを毎回読んでおりました。日頃の目の病気が良くなり、薬代が要らなくなりましたので、神様への御礼として……。

(春日市 N・H 22才 男)

■問題点が解りました

*「毎日新聞」で中村先生のコラムを毎回読んでおりました。日頃の目の病気が良くなり、薬代が要らなくなりましたので、神様への御礼として……。

(宮崎県 T・H 女)

*いつも「会報」を読むだけの会員です。心ばかりの寄付でごめんなさい。

(福岡市 M・J 女)

*故佐藤雄二氏の意志を継ぎ、少しでもお役に立てればと思います。

(熊本市 T・O 女)

(北九州市 K・A 女)

*中村先生からのメッセージに領きながら、PKO法案成立を耳にする。日本は一体どういう国なのでしょう？

(西宮市 K・S 女)

*中村医師のお話はいつても人間何が大切な事か、いかに生きたらいいのかを問われ考えさせられます。目先の事にとらわれず深い人間になりたいものです。ポーンナスが出ました。役立てて下さい。スタッフの協力があってこそペシャワール会

です。

*みなさんの地に根ざした活動に心が動きました。ワーカーの資料希望します。

(千葉県 Y・I)

*秋田県 M・K 男

*会報31号の阿部謹也氏の「自分を変えろ」国際化の文に吾が意を得たりの思いです。

(福岡市 K・I 男)

*会報を読むことで、いつもは忙しさの中で忘れてしまう大切なものをふつと気が付かせてもらっています。私も医者のお卵として、少しでも先輩達に近づけるよう努力したいです。

●事務局だより

*七月の緊急アピール「アフガン国内診療所」計画にご寄付を！新会員をご紹介下さい！」に込めて約三百人の新会員が増えました。これで会員数の実数が二千人を越えたことになりました。ご寄付の方は、同時に行なった各種マスコミによる広報の効果も重なって、百万円近くになりました(個人寄付)。

ご協力ありがとうございました。

*現地の方は、この春から秋にかけて、アフガン難民(パキスタン側)の約半数の一五〇万人ほどが帰郷したということです。嬉しいことなのですが、ダラエ・ヌール診療所は続々と帰郷する難民でてんでこ舞のようです。加えてマラリアの大流行と結核の増加で、薬品補給・スタッフの増員とその対応が予想以上に厳しい状況になっております。またペシャワールのJAMS本部も、他の難民援助団体(NGO)の撤退や活動休止により患者さんが殺到、今年度上半期だけでJAMSの総診療数は五万四千人(昨年は一年間で四万人)となっております。現地の事業もこの冬から春にかけてが正念場です。日本側の補給も今が踏んばり時かと思えます。更なるこ

理解をお願いいたします。

*この秋には中村先生をはじめ四人のワーカーが現地に赴きました。三年めの藤田看護婦(鹿児島出身)、三度めの林放射線技師(福岡出身)、一年めの栗林看護婦(熊本出身)、長谷川医師(北海道出身)です。ようやく私たちの活動も現地の土壌に根を伸ばしつつあると言えるものかも知れません。息の長い持続だけが力だと思えます。

〔〇村から〕

◆アララの神の思召かどうか、いつのまにか事務局員になっていました。ある時はお金を数え、ある時は手紙の文章に頭を悩まし、そしてある時はペシャワール直送の絨緞売りに変身しています。知られざるドクター中村の素顔に、笑ったり困ったり。ここは誰でもできる事のある所です。そして無印良品(?)の楽しい仲間がいっぱい。水曜の夜、気軽に立ち寄って下さい。(絨緞買って！野田)

〔お願い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡YMC Aペシャワール会宛でお願いします。

(〒810 福岡市中央区天神一丁目10-24 福岡三和ビル4F 郵便振替 福岡9-6559 六七七四〇)

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ

●増補版

ペシャワールにて
— 癩(らい)そしてアフガン難民

中村哲著 四六判上製二六〇頁 価一八五四円

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであると言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、近代化による伝統社会の破壊、および凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩まばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしに人間と神に触れることができる。

(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ
石風社

福岡市中央区大名1-2-15
電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八二〇 福岡市中央区大名一丁目一〇-二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二二三七二) 内におく。